

就職活動の環境変化に対応する大学の挑戦

1・2年次のプログラムを拡充し 学生の“納得度”が高い就活を支援

2年生対象の新たな就業体験型プログラムを実施するなど、低学年向けのキャリア支援に力を入れている立教大学。具体的なプログラムの内容や、取り組みの背景にある考えについて、同大学のキャリアセンターに話を聞いた。

立教大学キャリアセンター



キャンパス／東京都豊島区、埼玉県新座市 学生数／19,621人
学部／文、異文化コミュニケーション、経済、経営、理、社会、法、観光、
コミュニティ福祉、現代心理、スポーツウエルネス、Global Liberal Arts Program
キャリアセンター構成員／21名（専任16名、兼任1名、非常勤4名）

低学年向けのキャリア支援

「知っていること」を増やして 低学年からのキャリア観醸成を促進

新卒採用の現場では、学生優位の売り手市場が続いている。かつては多くの大学が「就職率」を重視していたが、近年は「学生の就職に対する満足度」を大切に考える大学も見られる。こうした状況の中で、立教大学は低学年向けのキャリア支援にも力を入れている。

同大学が行う低学年向けのキャリア支援の一つとして1・2年生限定の「スタディ

ツアー」（毎年11月頃実施）がある。スタディツアー参加者は、大学と連携する企業を訪問し、職場や施設の見学、社員との懇談、業務内容を体験するビジネスゲーム等を通して、社会のしくみや働くことへの理解を深める。

このプログラムの狙いについて、立教大学キャリアセンターの河崎真理課長補佐は次のように説明する。

「将来“やりたいこと”は、自分が“知っていること”の中からしか生まれません。しかし、学生が知っているのは、世の中にあ

る企業のごく一部ですし、社会に対する理解も十分ではありません。持ち合わせている知識だけで就職活動をするには限界があります。近年は『3年生になったらインターンシップに応募して、選考に進まないでダメ』と考える学生も少なくありません。3年生では視野を広げる時間が少ないからこそ、低学年時にキャリア観の醸成につながるプログラムが必要だと考え、スタディツアーを実施しています」。

2024年度は、食品メーカーや不動産会社、航空会社など28社が協力。延べ838人の学生が参加した。

「ホンモノの就業体験」が生む 学生の納得度と学修行動の変化

2024年度からは従来行っていた「立教型インターンシップ」を改革し、新たに2年生対象の就業体験型プログラム「Rikkyo My Career Gate」を実施した。これは大学と企業が連携し、学生に「ホンモノの就業体験」をさせるプログラムだ。

このプログラムの特徴は事前・事後の研修をしっかりと課している点だ。同大学キャリアセンターの三浦実幸氏は次のように説明する。「参加を申し込んだにもかかわらず、事前研修に参加していない学生には、キャリアセンターのスタッフが直接コンタクトを取って、その学生個々の事情に応じ

て丁寧に対応しています」。

最初の説明会は5月に実施し、6月に学生と面談して参加者を決め、7月に事前研修、8・9月に企業に送り出す。9月中旬には、事後研修を行い、日報や報告書を提出してもらう。企業での研修は3日間以上（15時間以上）を最低ラインとした。

学生が企業を理解するだけでなく、業界への理解を深められる内容にするための工夫も欠かせない。「就業体験の内容は、企業に主導して決めてもらっていますが、キャリアセンターの担当者も打ち合わせに同席し、決定しています。その際、インプットだけでなく、営業同行、イベントの企画・運営、プレゼンなど就業体験の機会も全日程の4割以上設けてもらえるよう依頼しています」（三浦氏）。2024年度は、33の企業・団体に、71人の学生を送り出した。

研修や提出物があり、学生の負荷が大きいプログラムだが、参加者からは「社会について考える機会が増えた」という声が寄せられるなど、好評だという。また、「今後、どのような授業を履修すればいいか、考えるヒントになった」という感想も聞かれており、学生が体験を体験だけで終わらせず、その後の学修行動にもつなげるなど、従来のキャリア支援プログラムの範囲を超えた価値も提供できている。

そのほか、1・2年生が参加できるプログラムとしては、「社会を知る講座」があ



スタディツアーの様子



Rikkyo My Career Gateの様子

る。これはビジネス社会で起こっている変化やこれからの働き方をテーマに、その第一線で活躍する社会人から話を聞ける講座だ。最近では、「SDGs×ビジネス」

「SNSマーケティング」「NISA」「転職」などのテーマを取り上げた。これにより、働き方の多様な可能性を知ることができるという。

キャリア支援の背景にある考え方

全学的なキャリア教育のハブとして “点”から“線”の支援をめざす

立教大学キャリアセンターが低学年向けプログラムを拡充させているのは、受け身で就活に臨む学生の存在も一因だ、と河崎課長補佐は説明する。

「今は、ネット上に企業の情報が数多く飛び交っていますし、就活生向けのYouTubeチャンネルもたくさん開設されています。こうした情報はプッシュ型で送られてくるので、受け身でも情報は得られるでしょう。しかし、キャリアには正解、不正解はなく、一人ひとり違ったものであるはず。学生には自分でキャリアを選択する強さを身につけてほしい。まだ時間に余裕がある1・2年次に『世の中にどのような仕事があるのか』『働くとはどういうことなのか』について、思いを巡らせるプログラムを設けているのは、こうした考えがあるからです」。

加えて、同大学のキャリア支援においては「就活を終えたときに、本人が納得していること」を重要視していると話す。「本学は就職をゴールとは位置付けていません。就職は人生のマイルストーンであり、自己実現に向かう途中段階の“点”です。キャリアセンターとしては、就職の先まで見通した“線”の支援を行っていきたいと考えています。学生が自分らしい人生のあり方を考

え抜いたうえで就活をして、将来を自ら選択すれば、それは納得できる就職活動だったと言えるでしょう」。

現在、立教大学は、「RIKKYO Learning Style」という学びを展開している。これは、学部の専門科目や、全学共通の教養科目、留学、インターンシップ、クラブ・サークル活動やボランティアといった正課外活動を含め、立教大学でのあらゆる学びを統合した学びのスタイルだ。「RIKKYO Learning Style」では大学4年間で「導入期」「形成期」「完成期」の3つの期間に分けている。キャリア支援においても、1年次春学期からの「導入期」は自分や社会を知るスタート段階、1年次秋学期からの「形成期」は将来を考え、進路を具体化する段階、3年次春学期からの「完成期」は社会に出る準備をする段階と位置付けている。

「キャリア実現に向けた支援は、キャリアセンターだけで行うものではありません。各学部に理念や育てたい人材像がある中で、正課科目の中にキャリア関連科目を置いて多様なキャリア教育を実施しています。また、各学部にキャリアサポーターがいて、学部ならではの支援も行っています。キャリアセンターはこれらの活動のハブとして機能し、本学ならではのキャリア教育を推進していきたいと考えています」（河崎課長補佐）。